

福田誠治著「フィンランドは教師の育て方がすごい」

亜紀書房 2009年3月30日刊を読む

1. なぜコンピテンシーを教育の目標に据えたかについて、PISA は「教えられた知識と技能から超える」ことと説明しているが、これは伝統的な学力観の否定を意味している。
2. PISA 『執行部要約』では、「省察、それはキー・コンピテンシーの心臓」と表現して、コンピテンシーをつなぎ止める決定的な能力として「省察(熟考)」ないし「省察的な思考と行動」に着目した。
3. PISA が理解する「省察」とは、一つには「自己の思考や行動を吟味する」という「メタ認知能力」と、また一つには「二者択一を超えて」と表現されるように単純な即断ではなく「ねばり強く考える」「熟考する」という意味がある。この両者とも、「比較的複雑な精神過程」である。
4. とりわけ、PISA 執行部は、この力こそ社会性を生み出すものだとして、次のように言っている。

「それは、諸個人がどう考えるかということに関してだけでなく、どのようにして諸個人が、自己の思想や感情、社会関係を含み込みながら、経験をより一般化して作り上げていくかということでもある。このことは、諸個人が、社会的圧力から離れて、異なる展望を持ち、独立した判断を下し、自己の行動に責任をもつということを実現する、あるレベルの社会的成熟に到達することを要請する」(傍線は福田)
5. ここで言う社会性とは、社会的圧力を受けて不本意ながら同調するというような適応的行動ではなく、社会的圧力から離れて、自分の独立した判断で、自由に行動することを意味しており、このような自由が許されていて初めて自己責任が問われることになるというのである。個々人が、社会を批判したり、「異なる展望」をもつことまで含んで自律した人間が想定されていることは、特に注目すべきであろう。民主主義とは、そういうものらしい。
6. 言い換えれば、個人一人ひとりが「省察的に考え行動する」ことは、キー・コンピテンシーの枠組みの中心軸をなすというのだ。「省察」とは、「公式や方法を直面する状況に対して型どおりに適用する能力」だけではなく、「変化させたり、経験から学んだり、批判的な展望をもって思考し行動するという能力」もまた含んでいるというのである。

[コメント]

PISA の根底に流れる学力観である「キー・コンピテンシー」を支えるのは「省察」であるが、福田先生の本書は、OECD の研究成果をフィンランドを例に非常によく、またわかりやすくまとめている。教育関係者、必読の書と考える。

- 2009年5月21日林明夫記 -